

心臓血管外科に前川教授が就任



2026年1月1日付で、名古屋市立大学病院心臓血管外科の第3代診療科部長(教授)を拝命いたしました前川厚生です。当科は2001年の開設以来、小児先天性心疾患をはじめ、成人心疾患や成人先天性心疾患まで幅広い診療を行い、地域医療に貢献してまいりました。私はこれまで国内外で研鑽を積み、低侵襲心臓手術(MICS)やロボット支援手術を中心に、弁膜疾患、冠動脈疾患、大動脈疾患など多くの手術に携わってまいりました。とりわけ患者さんの身体的負担の軽減と早期回復を目指した低侵襲心臓手術による外科治療に力を注いでおります。また、緊急・準緊急手術にも数多く対応し、常に患者さんご家族の不安に寄り添いながら診療にあたっております。当院は名古屋市中心部に位置し、広域からのアクセスに優れております。6月には救急災害医療センターも開棟し、より高度で迅速な医療提供体制の整備が進んでいます。また、名市大では心臓血管外科だけでなく、循環器内科や麻酔科、放射線科など、心臓血管の治療にかかわる専門家集団のハートチームで治療にあたっています。今後もハートチームの一員として地域医療機関の皆さまと一層連携を深め、安全で質の高い医療を継続的に提供してまいります。今後ともご指導、ご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

患者さんによりそい、安心を“手元に” 手術説明アプリ『あなたの手術手帳®』を消化器外科が開発しました

手術を受けることになったとき、多くの患者さんやご家族は、不安や疑問を抱えながら日々を過ごされていると思います。医師からの説明はとても重要ですが、限られた時間の中で一度にすべてを理解することは簡単ではありません。「あとから見返したい」「家族にも同じ説明を共有したい」と感じたことのある方も多いのではないのでしょうか。

『あなたの手術手帳®』では、医師の説明内容をもとにした動画や資料を、患者さんご自身のスマートフォンなどでいつでも確認することができます。通院の間やご自宅で、ご家族と一緒にゆっくり見返していただくことで、理解を深めながら安心して治療に臨んでいただけるよう支援します。

また、手術に関する大切な情報や注意点を「手元に残す」ことで、不安の軽減や納得した治療選択につながることを目指しています。私たちは、医療は患者さんとともに考え、進めていくものであると考えています。

現在は消化器外科での活用を進めながら、より多くの患者さんに安心を届けられるよう改良を重ね、将来的には他の診療科や医療機関への展開も視野に入れています。これからも患者さん一人ひとりに寄り添い、分かりやすく安心できる医療の提供に努めてまいります。

お問合せ先 | 消化器外科 鈴木卓弥 052-853-8226 tsuzuki8@med.nagoya-cu.ac.jp

あなたの手術手帳®

医師の説明前や説明後に
手術説明動画を繰り返し閲覧することで
患者さんの理解はより深まる

病院待合室ではスマートグラスで閲覧

<https://ope-note.jp/>

さくらほっと NEWS

vol.71 令和8年夏号



救急災害医療センター外観

救急災害医療センターの機能をご紹介…2	心臓血管外科に前川教授が就任……………4
名市大病院のチカラ Vol.39 ……………3	患者さんによりそい、安心を“手元に” 手術説明アプリ『あなたの手術手帳®』を 消化器外科が開発しました…4

救急災害医療センターが6月1日開棟しました

名古屋市立大学病院 救急災害医療センターが2026年6月1日に開棟しました。救急医療、災害医療、医療人育成機能を強化した救急災害医療センターは、地下1階、地上8階建て、延床面積27,600㎡を誇り、救急災害医療施設として日本最大級となります。平時から災害時まで、高度急性期医療を継続して提供し、地域の医療を支えていきます。

救急災害医療センターの機能をご紹介します

救急医療

市内の救急搬送件数増加に対応するため、初療室の増室やハイブリッドERの導入など、スペースや機能を大幅に拡充し、年間1万件以上の受け入れが可能となる体制を整えました。また、専門家による教育及び緊急対応の機能を備え、救急・災害医療のさらなる進化を目指す拠点として市立大学病院に「E-ステーション」を設置しており、医師と看護師が乗り込み、病院から直接現場へ向かう「ドクターカー」の24時間体制の運用もスタートしました。



初療室



ハイブリッドER



ドクターカー

災害医療

巨大地震時でも診療機能を維持できる免震構造となっており、災害時でも手術・透析・分娩が可能となる設備を設けているほか、屋上にはドクターヘリのみならず、災害物資を運ぶ自衛隊ヘリの離着陸ができるヘリポートを備えています。また、災害時のエレベーター停止や復旧の遅れに備え、地上からヘリポートまでを繋いだ約700mのスロープを設置しており、スロープ内はストレッチャーの通行も可能です。



免震構造



ヘリポート



屋内スロープ

医療人育成

7・8階には、臨床教育シミュレーションセンターを移転・拡充しました。12の研修室、8つの演習室、多目的に利用できる複数の大規模教室などを備え、救急や周産期・新生児医療をはじめとするチーム医療・医療安全のさらなる向上、質の高い医療人材の育成を目指し、より多様な教育・研修への対応が可能となりました。



緊急蘇生処置用シミュレーター



災害時仮設病床

災害時には、研修室・演習室・大規模教室などに仮設ベッドを配置し、被災重症患者を受け入れるためのスペースとして活用します。

名市大病院のチカラ Vol.39

内分泌・糖尿病内科

進化する1型糖尿病治療—インスリン製剤と自動インスリン投与療法

1型糖尿病はインスリンを作る膵臓のβ細胞の破壊により発症します。

β細胞は一度壊れると元に戻らないため、治療にはインスリンの注射を一生続ける必要があります。インスリン注射は1921年のインスリン発見の翌年から行われている治療法ですが、安全で使いやすい新しい種類のインスリンや注射法が近年次々と登場し、劇的な進化を遂げています。

超々速効型インスリン

従来のインスリンでは、効き始めるまでのタイムラグや血糖値低下後の作用残存がありました。超々速効型インスリンは超速効型よりもさらに速やかに効き、すぐに作用が消えるため、食後の血糖上昇をより理想的に抑えられと期待できます。

週1回持効型インスリン

これまでの持効型インスリンでは毎日の注射が必要でしたが、週1回の持効型インスリンを使えば少しでも注射回数を減らし、ご本人や介護者の負担軽減と確実な注射の実施につながります。

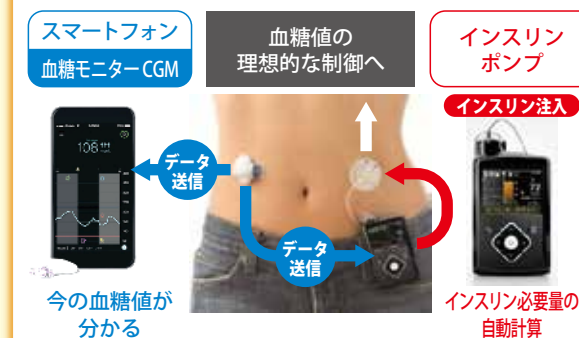
自動インスリン投与療法 (AID: Automated Insulin Delivery)

持続血糖測定器で得られたリアルタイムの血糖値情報を、Bluetoothなどの無線技術でインスリンポンプに送信し、インスリンの皮下連続注入速度を電子

的に制御することが可能になりました。血糖値の上下に応じてインスリンの投与速度を自動で細やかに増減することで、血糖値をより理想的な範囲内に保てる可能性があります。特に、妊娠を目指す方、1日4～5回のインスリン自己注射で上手くいかない方、合併症予防のためにより精密な血糖マネジメントを目指す方など、1型糖尿病を持つ方の強力な味方です。

内分泌・糖尿病内科ではこれら最新の医薬や技術を用いて、患者さんごとに最適な治療を提案、提供してゆきます。

自動インスリン投与療法(イメージ図)



中央放射線部

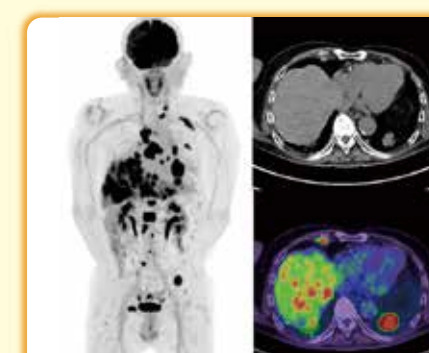
救急災害医療センターにPET-CT装置を導入—高精度な診断から最適な治療へ

救急災害医療センター地下1階にPET-CT装置を導入しました。PET-CT検査 (FDG-PET) とは、がん細胞がブドウ糖を多く取り込む性質を利用した検査です。微量の放射線を放出する薬剤 (¹⁸F-FDG) を体内に投与し、その集まり具合をPET (陽電子放出断層撮影) でとらえ、CT画像と重ね合わせることで病変の位置や広がりを一度に把握できます。導入した装置は、半導体を利用した検出器を搭載し、最高クラスの時間分解能を有しており、従来機より格段に高感度・高分解能な画像が得られるとともに、

ノイズが大幅に低減されるため小さな病変の検出が可能です。また、検査時間の短縮や薬剤・被ばく量の低減にも貢献します。PET-CT検査は全身の悪性腫瘍の病期診断や再発・転移の評価をはじめ、てんかんや心臓サルコイドーシス、血管炎、認知症の診断にも活用されています。本装置の導入により、地域の皆さまにより精度の高い診断と治療をご提供できるよう、チーム一丸となって取り組んでまいります。



PET-CT装置



(左)全身PET画像 (右上)CT画像、(右下)PET-CT画像